

## マクミラン／ヴァイオリン協奏曲

1959年生まれのエドワード・マクミランは才人が薙められているイギリス作曲界の中堅である。親しみやすくエネルギーに満ちた彼の音楽は、生まれ故郷のスコットランドの風土やケルトの民族音楽から多くを吸収し、時にはスカンジナビアや中欧、アジアの要素への関心も示しながら、カトリックの信仰に深く根ざしたものとなっている。

マクミランはこの十数年、ピアノ、ヴァイオリン、オーボエ、ヴィオラ、打楽器など、演奏家のヴィルトゥオージティを引き出す協奏曲を次々と書いてきた。2010年初演のヴァイオリン協奏曲はワディム・レーピンの独奏を念頭に作曲され、彼と2008年に他界した母のエレンに献呈。ゲルギエフの指揮で世界初演となったロンドンに続き、フィラデルフィア、ニューヨーク、パリ、アムステルダムで演奏され、好評を博した。日本では2012年に諏訪内晶子とN響が初演している。

母親の死を悼む音楽といっても単純な哀歌ではない。全曲に散りばめられたシンプルな楽想がときに「死の舞踏」のイメージを喚起し、ときに母親との暖かい心の交流や懐かしい少年時代の思い出を表象して、明暗を行き来する。第1楽章「ダンス」は冒頭から独奏ヴァイオリンが主要主題を奏でる。力強いモチーフの反復に続き、ヴァイオリン独奏がすばやく細切れの主題を弾き、続いて流れるような歌謡旋律となる。これらの要素を用いて展開されるが、途中、スコットランド風のリールという舞曲が挟まれる。オーボエの抒情的な歌で始まる第2楽章「ソング」は、続いて弦合奏の主題や和声に対して独奏ヴァイオリンがオブリガートのように楽想を紡ぐ部分となる。やがて独奏がほんの一節、主題旋律を奏でたのち、再びオブリガートの動きで弦合奏を装飾する。後半になると、閃く高音域での夢想的な楽想へと一転する。独奏パートには「簡潔で子供のように 民謡調の踊り」と記されている。続いて嵐のようなフレーズが炸裂するものの、やがてフルートとピアノのみの民謡風の部分となって、静かに終結する。第3楽章「ソングとダンス」はドイツ語で「1、2、3、4、母が私と踊る」という言葉のつぶやきとともに始まる。次第に荒々しく闊達な部分となり、「死の舞踏」風の混沌とした部分を経て、突如、優雅でテンポの速い舞曲になる。中間部は前に出てきた素材によるワルツが響き、ドイツ語のつぶやきが入った後、独奏の華麗なカデンツァを経て、短いコデッタで終わる。

楽器編成：フルート2（ピッコロ持ち替え1）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持ち替え1）、クラリネット2、ファゴット、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、チューバ、ティンパニ、ヴィヴラフォン、鞭、フレクサトーン、コンガ2、バウロン、バスドラム、銅鑼、アンティークシンバル、マリンバ、チャイム、ベルツリー、ウインドチャイム、ヴィブラスラップ、スネア・ドラム、チャイニーズゴング、ピアノ、声、弦五部 ※スコア上の表記

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

白石美雪